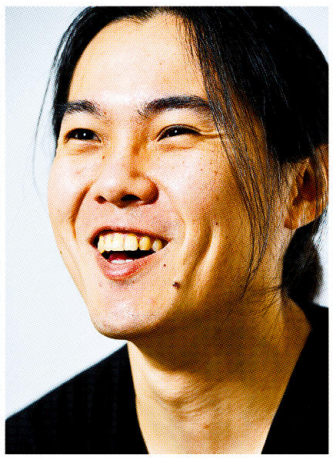
第3回 絹谷幸二賞

若手画家を応援し、具象絵画の可能性を開くことを目的にした第3回絹谷幸二賞（毎日新聞社主催、三井物産協賛）は、画家の桑久保徹さん(32)に決まった。奨励賞には京都市立芸術大学大学院生の西田菜々子さん(24)が選ばれた。贈呈式は16日、東京都千代田区の学士会館で行われる。

桑久保徹さん

神奈川県座間市



くわくぼ・とおる 78年、神奈川県生まれ。多摩美術大卒。02年、トーキョーワンダーウォール入選。＝津村豊和撮影

桑久保さんにとって、昨年は特に充実した1年だったと言えよう。東京・国立新美術館主催のグループ展「アーティスト・ファイル2010」に最年少作家として参加。韓国の有力ギャラリー、東京のトーキョーワンダーサイト（TWS）渋谷と、大きなステージでの個展も続いた。新作を描くために無理を重ね、体調を崩して入院したほど。だが、「現代美術になじみのない人にも楽しんでもらえた」と確かな反応を得た。そのうえに朗報が届き、「描き続ける決意を新たにしました」と笑顔を見せる。

油彩画ならではの豊かな絵肌が最大の魅力。中でもTWS渋谷で「共同アトリエ」など大作5点を並べた展示室は圧巻だった。海辺を思わせる舞台に多数の絵画が並ぶ光景などが描かれている。リズム感のある厚塗りのタッチ、色彩の鮮やかな協奏、細部に仕掛けられたユーモア。そのすべてが見事に響き合う。

学生時代、「いかにも現代美術」という先鋭的な表現になじめなかった一方で、「絵を描く行為に正面から向き合うのも避けていた」。そんな時、「劇中画のようなものなら描けるかも」と考えたのが、ゴッホやモネを思わせるタッチのきっかけだった。『This is 泰西名画だろう』という軽いノリでした。でも、描いているうちに生身の僕が画面に表れて、面白くなってきた。マティスみたいなスッとした線は描けないし、今流行のオタク的センスもない。短くて太いタッチが体に合っていたんです」

大きな場での発表を経て、絵画の存在意義を改めて考えている。

「見る人の身体感覚に訴える作品がなければ、美術館に足を運ぶ意味はない。その意味で、身体性が表れる絵画は可能性があると思います」

豊かな絵肌で訴え

「共同アトリエ」2010年
油彩、キャンバス 194㌢×259㌢
©Toru Kuwakubo

■選評

自分の世界を体現

本江邦夫さん
（多摩美術大教授）

今日の絵画における最大の問題は依然として、描くべき主題をどこにみつけるか、ということに尽きると思います。

明確なコンセプトがあろうがなかろうが、結局は自分自身を描くしかない、我が身を絵の具に託して自分の世界を打ち立てるしかないのだ――このあまりにも自明の事実にいち早く気づき、それを体現したところに桑久保徹さんの非凡さがあります。

これに対し、いかにもありそうな日常的な情景に肉薄しつつも、そこから身をそらすことで、ありきたりの空間に脇から入り込んだかのような不思議な感覚を与えるのが、西田菜々子さんの作品世界のひそかな魅力と言えるでしょう。絵画にとって空間は依然として新しい課題なのです。

古典的様式で変革

中井康之さん
（国立国際美術館主任研究員）

桑久保徹さんの作品は、日本近代洋画の黎明（れいめい）期に浪漫（ろまん）主義的なスタイルによって芸術への情熱を具現化していった作家たちの作品を思い起こさせるような、強烈な印象を与えます。と同時に、時代錯誤と思われるような表現かもしれません。しかしながら、忘却の縁にさらされていたこの古典的とも言える様式によって、停滞感のある日本の美術界に変革をもたらすものと確信しました。西田菜々子さんの作品は、日常の光景と異空間とをつなげる超現実主義的な手法を用いながら、それを端緒として、絵の具という媒体が、表現する対象へと変わりゆく際を楽しむかのような絶妙な表情を見せてくれます。このような好対照とも言うべき2人を、今回は選出するに至りました。

絵画の喜び明快に

福田美蘭さん
（画　家）

本賞に推した桑久保徹さんは、他の候補者と比較して選んだというより、その力量が抜きんでて目立つという印象だった。作品には何をどのように描くかにおいて、必要なものを取り込んでいく資質があり、着想、色彩、ユーモアにも確かなセンスを感じ、そのテーマは時に深刻で、現代に共鳴する奥行きを持ちながらも、絵画が本来持っているはずの見る楽しさや喜びを明快に伝える強さがあった。

奨励賞は、2次に残った候補者がおのおのに充実した成果を備えていたので、比較することの難しい選考となったが、西田菜々子さんの作品は、筆の伸びやかさの中にイメージを膨らませていく容量の広さと、力みのない面白みに豊かなスケールを感じ、奨励賞に推した。

奨励賞

西田菜々子さん

東京都新宿区

パズル感覚と身体性

にしだ・ななこ 1986年、宮城県生まれ。今春、京都市立芸術大大学院絵画専攻修了見込み。＝幾島健太郎撮影

「まさか！と思いましたが、創作を続けていく勇気をいただきました」と瞳を輝かせる。

散策や旅行の折に撮影し、パソコンに保存する約1万枚の写真がイメージの源泉だ。寺社や景色などをパソコン上で加工し、絵の構図を考える。

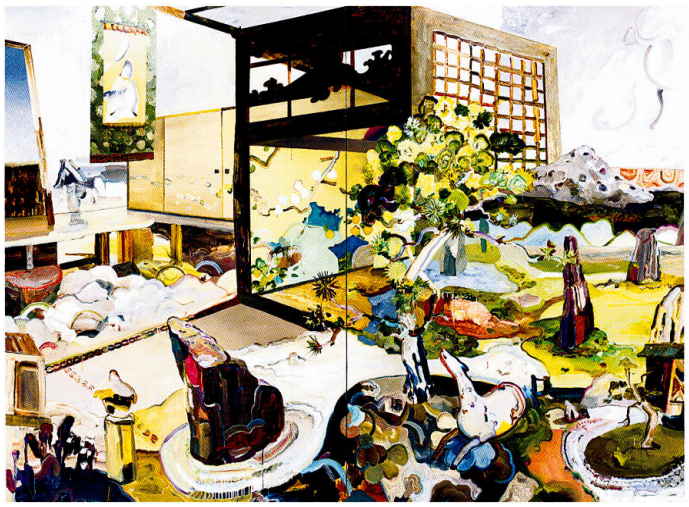
「バラバラにして組み直すパズルの感覚です」。昨年、大阪市のOギャラリーeyesと名古屋市のSTANDING PIN E-cubeで発表した「niwa／イン京都」などは、この手法を取り入れた最初の作品だ。

大学院に進む前は心象風景や人物を描いていた。だが、しっくりこない。「何をどう描けばよいか分からない、と悩みました」

アルバイトでウェブデザインを始めたことが、転機になった。「古都が好きで愛知の高校から京都の大学へ進んだ初心に戻り」、外の世界に目を向けて絵が変わった。

パソコンでつくった構図には固執しない。モチーフは足を運んで見たものに限っているし、絵筆を持つ身体性を画面に込めることも意識する。「油絵の具は、身体性を一番反映しやすい点が魅力だと思います」

4月から東京の大手IT企業で働く。「自分の描きたいものを描き続けるため、まずは独り立ちしようと。新居にも創作のためのスペースを確保しています。絵のために頑張ろうという思いでいっぱいです」



「niwa／イン京都」2010年
油彩、キャンバス
220㌢×270㌢
©Nanako Nishida

■絹谷幸二賞

日本を代表する画家の一人で日本芸術院会員の絹谷幸二さん＝写真＝が08年、「頑張っている若い世代を応援したい」と賞創設を毎日新聞社に呼びかけ、実現した。絹谷さんは74年、具象絵画の登竜門の安井賞（96年度の第40回で終了）を史上最年少（当時）の31歳で受賞。画家として生きる自信を得たという体験がある。

賞の対象は35歳以下で、基本的には筆か、それに準じる画材や身体を用い、紙やキャンバスなどに描いている画家。彼らが国内開催の展覧会に出品した具象的傾向の絵画をもとに選考する。毎日新聞社が全国の美術館学芸員や美術評論家、ジャーナリストらに推薦を依頼。回答をもとに、3人の選考委員が2度の審査を経て決定する。賞金は本賞100万円、奨励賞50万円。

■選考過程■　25人を対象に

45人に推薦依頼を発送し、27人から回答を得た。候補者として推薦された23～35歳の25人（そのうち1人は3人が推薦）を選考の対象にした。

候補者にポートフォリオ（経歴や作品写真をまとめたファイル）を送ってもらい、事務局が選考委員3氏に郵送。選考委員はそれを精査し、鑑賞可能な作品は展覧会に足を運んでじっくり見た。

1次選考では、各委員がそれぞれ10人を選び、多様な見地から討議。厚地、今津、神戸、桑久保、佐藤翠、西田、北城、渡辺の8氏が2次選考に進んだ。実作品を見ていない候補者については、委員がアトリエや所属ギャラリーを訪問。昨年発表した作品の一部を確認した。

2次選考では、まず各委員がそれぞれ3人を選び、厚地、今津、桑久保、佐藤翠、西田の5氏に絞り込んだ。ここで、常に満票を得てきた桑久保氏が「一頭地を抜いている」との認識で一致。豊富な発表歴を誇る画家へ授賞する意味についての議論になった。その結果、「若い時に賞という形で認められるのは励みになる」「絵の具を使う絵画の根源的な魅力を有し、絹谷幸二賞に最もふさわしい」との結論に至った。

奨励賞は討論と2度の投票を重ね、将来性を買われた西田氏が競り勝った。

■推薦された人たち

厚地朋子、井上光太郎、今津景、上間彩花、瓜生祐子、神戸智行、桑久保徹、河野里沙、興梠優護、佐藤未希、佐藤翠、柴田高志、島嵜りか、神馬啓佑、関根直子、五月女哲平、冨井綾子、南光理絵、西田菜々子、はまぐちさくらこ、平川恒太、藤部恭代、北城貴子、山下耕平、渡辺豊

■回答を寄せた推薦者

石川健次、尾崎信一郎、翁長直樹、加藤義夫、川浪千鶴、岸桂子、黒田雷児、三田晴夫、高階秀爾、鷹見明彦、手塚さや香、名古屋覚、野地耕一郎、林洋子、原久子、土方明司、藤田一人、松井みどり、松本透、村田真、森本悟郎、山口裕美、山口洋三、山下裕二、山本淳夫、和田浩一、渡辺亮一
（いずれも50音順、敬称略）